

タイトル	献辞(山田定市教授退職記念号)
著者	内田, 昌利; 栃内, 香次
引用	北海学園大学経営論集, 2(4): i-ii
発行日	2005-03-25

献 辞

経営学会長 内 田 昌 利
経営学部長
経営学研究科長 柄 内 香 次

山田定市先生には、平成17年3月をもって退職されることになりました。これを記念して経営学部・経営学研究科ならびに同経営学会は、これまでに先生から賜りましたご指導とご厚誼に深甚の謝意を表するために、退職記念論文集の刊行を企画しました。本書をここに謹んで先生に献呈いたします。

先生が乞われて北海学園大学に赴任されましたのは、平成10年4月のことです。すでに平成8年に北海道大学教育学部を、また再任地の室蘭工業大学を同10年に定年退官された先生が本学に赴任されたことは、後に誕生することになる経営学部にとってはまさしく天恵ともいえる人事を意味することになります。

と申しますのは、平成10年当時の経済学部は、臨時定員増の取扱いをめぐって改組転換案を構想しているところでした。平成11年の初めには、経営学科を経営学部独立させ、空いた経済学部にもう1学科つくるという新学部・新学科設置構想が全学的に承認され、それに対して法人側からはまず教員組織の充実を図って大学院（経営学研究科）をつくることから始めるよう求められるという状況になりました。

そのとき山田先生は「私でお役に立つなら」と経営学研究科への異動を快諾してくださいました。北海道にある大学院経営研究科の特色ともなる協同組合経営論に担当科目が変更になることにも進んで協力してくださいました。平成12年の経営学研究科修士課程の設置、同14年の同博士後期課程の増設は先生のそうした心強いご支援があって成功し、その勢いを借りて愈々15年には待望の経営学部開設に至ることができました。その間に先生には陰になり日向になり時に紛糾しかねない事態を良識的方向に決定づけていただきましたし、そのうえに、15年4月からの1年間は経営学研究科長の要職も勤めていただきました。その意味で随分と先生には大切なポイントで助けていただき、勇気をいただいたものです。深謝とご高恩を心に刻んで忘れることはありません。

先生は分け隔てなく誰にたいしても謙虚で常に真摯に対応され、その清廉なお人柄に心服したのは私共だけではないでしょう。先生に接する機会のあった学生・教職員にとって、人生の中で出会うことができた数少ない尊敬する師であり続けるものと思います。

先生のこれまでの研究業績は膨大です。そのご著書・編著・研究論文は、農業経済学・協同組合論・農業市場論に関するものと、農民教育・社会教育・生涯教育に関するものとは大きく分けることができますが、そこに一貫して流れる視点と方法は、北海道という地域ないし地域住民の側からの視点であり、地域ないし現場を足で調べるという現場主義の方法です。この通底する視点と方法は、北海道という辺境の地が日本経済の変動と転換の中で絶えず調節弁的役割を担わされ、明治以降の長い開拓の歴史の中でスクラップ・アンド・ビルド政策のそのときどきの国の都合にあわせてビルドの対象にもなれば、スクラップの対象にもなるといったよう

に、その身勝手さに翻弄され続けてきた先人たちの流した汗と血をここに生を受け育まれてきたひとりとして全身全霊で受けとめ、ひとりの静かなる怒れる主体として常に未来に真正面に向いて活動し続けてきた者のそれであるだろうと拝察します。

このことは、この地にある経営学部・経営学研究科にとって、経営学が合理性や効率といった機能主義的な普遍性を追求する学であることにとどまらず、常に地域や社会との特別な関係性が問われることを意味します。先生からご教示いただいたこの点を深く心にとめ、さらなる前進をはかっていくことをお約束して、ご退職にあたっての感謝の言葉とさせていただきます。これまでお世話いただきました学生・教職員を代表して、心より“ありがとうございました”。

ご退職の後には、ご自愛いただいて、いつまでもご健勝で私どもをご教導くださいますようお願いいたします。

なお、本書の刊行にあたりまして、学外にあって、ゆかりの先生方にご寄稿をお願いいたしましたところご快諾を賜り、ご玉稿を収載することができました。これもひとえに山田先生のお人柄のなせるわざではありますが、ここに厚くお礼を申し上げる次第です。最後に、本書の企画・編集にあられた早川豊教授・浦野研講師をはじめご協力をいただいたお一人おひとりの皆様にお礼を申し上げ、山田定市教授退職記念号刊行のご挨拶の結びといたします。

2005年陽春3月を迎えて